

「お釈迦様の

十大弟子

仏陀の教え より

羅尊者（ラーフラ）

密行第一の羅喉羅（らごら）

仏陀（ブツダ）の実子

というより、ゴウタマ・シツ

ダルタ太子と妃であったヤ

シヨードラ姫とに授かった

子供です。仏陀（ブツダ）

は16歳で結婚されました

が、なかなか子宝に恵まれ

ず、27歳になったとき妻

のヤシヨードラ姫との間に

ようやく授かったのが一人

息子、羅尊者でした。

太子は我が子が産まれたと

き、「障礙（しょうげ）生

じたり」とこぼされたとき

れています。既に出家を決

意されていた太子にとって、

子供の存在は決意を鈍らせ

ることになりはしないか。

障礙（さまたげ）は原語で

ラーフラ。それが命名のい

われです。ちよつと気の毒

な気がします。ともあれ、

太子は29歳のとき妻子を

城に残し出家し、6年後仏

陀となられた。

さらに数年後、仏陀（ブツダ）は生まれ故郷であるカピラ城に弟子たちを伴って伝道に來られた。

今では仏陀として教団を率

い、民衆を教化し、崇敬を

集める仏陀（ブツダ）です

が、ヤソードラーとラーフ

ラにとつては、身勝手な夫

であり父親でした。

彼は父親のいないカピラ城

で王子として何不自由なく

素直に育てられました。

羅尊者が九歳になった時の

ことです。

仏陀（ブツダ）が久しぶり

に帰城することになったの

です。それを知った城の重

臣たちが、幼い羅尊者に入

れ智慧をしたのです。

「お父上に頼んで、お城や

財宝を息子に譲るとい証

文を書いてもらいなさい」

という内容でした。

それは、カピラ城主の権利

は事実上仏陀（ブツダ）に

あったことから教団に城を

乗っ取られるのではないかと重臣達が心配したのです。

「わたしは王になろうと思

います。どうぞ財産を下さ

い。お宝をお与えください。」

と言いながらすがりつく幼

い羅尊者に仏陀（ブツダ）

はびつくりしてしまいました

た。ことの重大さを知った

仏陀（ブツダ）は、舍利弗

と目蓮を呼んで羅尊者をニ

グローダの林に連れてゆき、

羅尊者を出家させてしまっ

たのです。

「お前には金銀財宝ではな

く、私が修行をして得た真

理の仏法という財産を継が

せてあげよう」と仏陀（ブツ

ダ）は申されたのです。

仏陀（ブツダ）はラーフラ

を精舎へ連れて帰り、舍利

弗尊者と目連尊者に指導を

委ねられました。

沙弥から比丘となり、やが

て阿羅漢果（悟り）を得ま

す。周囲はどうしても尊者

を仏陀（ブツダ）の子とし

て特別な目で見てしまいが

ちです。ですからなおのこ

と、尊者は戒律を遵守され

たのです。密行第一と称さ

れる所以です。

終わり

隣りのページの続き

源信は、泣きました。

まさに徹骨の慈悲です。

迷夢から覚めた心地で、

ひたすら、後生の一大事の

解決を求めて、勉学に励む

のでした。

それから25五年以上の歳

月が流れました。

ついに、阿弥陀仏の本願に

よつて、後生の一大事の解

決を果たした源信は、

「今度こそ、お母様に喜ん

でいただける」

と、郷里へ向かったのです。

ところが、途中で、自分へ

手紙を届けようとして急い

でいる男に出会いました。

何か胸騒ぎがした源信、封

を開いてみると、姉の文字

でした

「お母様は、もう70を超

えられ、体が弱くなられま

した。こころはくらく風邪で

寝込んでおられたのですが、

ますます衰弱され、明日を

も知れぬご容態です。そん

な苦しい息の中から、源信

が恋しい、源信に会いたい、と繰り返して言っておられま

す。どうか、少しでも早く

帰ってきてください」

驚いた源信は、ひたすら我

が家へ急ぎました。

「源信です。ただいま帰り

ました」母の耳元で、そつ

と告げると、

「よく帰ってきてくれたの

う。今生では、もう会えな

いかと思つていた……」

とつぶやき、顔に、生気が

よみがえってきました。

源信はすでに40歳を超え

ています。幼い日、比叡山

に登ってから、一度も顔を

見ていませんが、母は、毎

日、息子が仏法者の道を踏

み外さないようにと念じ続

けてきたのです。

今こそ母の恩に報いなけれ

ば、の思いで、源信は、仏

法を伝えるのでした。

息子の説法を聴聞して、母

も、阿弥陀仏に救われたと、

伝えられています。

源信僧都は、日本の仏教史

に、大きな役割を果たす、

偉大な僧侶となったのです。

親のこころ

木村 耕一編著

源信僧都に届いた

「母からの手紙」

親のこころ

母からの手紙は、子供に大

きな力を与えます。

日本の歴史上、最も有名な

「母からの手紙」は、源信

僧都のもとへ届いた手紙で

はないでしょうか。

生い立ちをみてみましょう。

源信僧都は、『往生要集』

の著者として有名です。

幼い時の名を、千菊丸とい

いました。早くに父と死に

別れ、母の手一つで育てら

れました。

千菊丸が、ある日、川原で

遊んでいると、一人の僧侶

が、川の水で弁当箱を洗っ

ていたの、「お坊さん、

その水は汚いよ。あつちに、

もつとききれいな川があるん

だよ」

と親切に教えました。

前日からの大雨で、水が濁っ

ていたのです。

すると僧侶は、

「仏教ではな、『浄穢不二』

といった、この世にきれいなものも、きたないものも

ないと教えられているんだ

よ」と、もつともらしく言

いました。すると千菊丸、

「浄穢不二」ならば、

なぜ、洗うの？」

と問い返したのです。

素朴で、しかも鋭い反撃に、

僧侶は、ぐつと詰まっして

まいました。

こんな子供に言い負かされ

たままでは引き下がれませ

ん。一策を思いつき、千菊

丸に尋ねました。

「十まで数えられるかい」

「そんなの簡単だよ」

「じゃ、やってみよう」

「いいよ、一つ、二つ、三

つ、四つ、五つ……、九つ、

十」

僧侶は、ニンマリして、

「おや、今、おかしな数え

方をしたね。一つ、二つと、

どれにも『つ』を付けるの

に、なぜ十だけは『とお』

と言つて、『つ』を付けな

いのかな」と、聞き返しま

した。すると千菊丸、

「それは、五の時に、『いつ

つ』と言つて、『つ』を二

つ使ってしまったから、十

の時には足りなくなつたん

だよ」と答えるではありませんか。僧侶は驚きました。

「こんな優秀な子を、出家

させたら、必ずや偉大な僧

侶になるだろう」

と思つて、早速、母親に会

いに行き、「お子さんは、

実に賢い。比叡山へ入れて、

学問をさせたらどうでしょ

うか」と勧めたのです。

子供を手離したくないのは、

どの親も同じです。

しかし、千菊丸の母は、

「仏法を学ばせたほうが、

この子のためにも、亡き夫

のためにもなるだろう」

と考え、承諾したのでした。

母は、千菊丸に、

「立派な僧侶になるまでは、

二度と帰ってきてはなりま

せんよ」

と言つて聞かせました。

千菊丸は、名を「源信」と

改めました。

母との誓いを守つて、一心

不乱に勉学に励んだので、

次第に「比叡山に源信あり」

と有名になり、宮中でも評

判になりました。

ついに、時の天皇より、

「源信から、經典の講釈を

聞きたい」と、比叡山に要

請があつたのです。この時、

源信は15歳でした。

内裏へ赴き、天皇はじめ群

臣百官に説法したのでした。

天皇は、年若い源信の、堂々

たる弁舌に感嘆し、褒美と

して、七重の御衣、香炉箱

などの珍宝を与えました。

晴れの舞台で大役を果たし、

名声を博した源信の喜びは、

天にも昇る心地でした。

「ああ、お母様にお伝えし

たら、どんなに喜んでくだ

さるだろうか」

源信は、早速、事の始終を

手紙に書き、天皇から贈ら

れた品々と共に、郷里の母

のもとへ送つたのです。

ところが、間もなく、母か

ら、すべての荷物が、送り

返されてきました。

そこには、次のような、手

紙が添えられていたのです。

私は、片時も、おまえの

ことを忘れたことはありません。

どんなに会いた

くても、やがて尊い僧侶

になつてくれることを楽

しみにして、耐えてきた

のです。

それなのに、権力者に褒

められたくらいで有頂天

になり、地位や財物を得

て喜んでいゝとは情けな

いことです。

名誉や利益のために説法

するような、似非坊主と

なり果てたことの口惜し

さよ。

後生の一大事を解決する

までは、たとえ石の上にな

ら寝て、木の根をかじつて

でも、仏道を求め抜く覚

悟で、山へ入つたのでは

なかつたのか。

夢のような儂い世にあつ

て、迷っている人間から

褒められて何になりました

う。後生の一大事を解決

して、仏さまに褒められ

る人にならねばなりません。

後の世を渡す橋とぞ

思いしに

世渡る僧となるぞ悲しき

母より